

MEDICAL NOW

2011
No.70

 SHIMADZU

京都モノがたり⑥ 銘品

京都に歴史を刻み、洗練を極めてきた京の銘品の数々。伝統工芸にかくれた物語をご紹介します。



野点傘など大きい和傘を手がけることが多いのも京都ならではの。和傘に用いる和紙は富山の五箇山和紙、竹は岐阜真竹、細かな素材には京真田紐、数奇屋金具など。

京和傘

柄にかけた手をゆっくりと上にすべらせハジキでカチッと留めると、開いた傘紙の上で雨音がリズムカルに響く——。洋傘とはひと味違う、雨の風情が軽やかな音と一緒に愉しめる。これが、和傘の魅力である。

和傘は奈良時代前後に中国から伝来し、当時は閉じたままの傘を雨よけとしてではなく、貴人に差しかけて日除けや魔除け、権威の象徴として使用していたといわれている。

これが広く浸透したのは、江戸時代中期。歌川広重や喜多川歌麿の絵にも描かれていることから、町人の生活必需品となっていたと考えられている。武士が内職していた一般的な傘があった一方で、美人画に描かれている着飾った女性が装いのアクセントとして持っていた華やかなものや、歌舞伎・日本舞踊など伝統芸能の小道具など、種類と用途は様々であった。

洋傘が主流の現代では、和傘の需要は昔から使われている踊りや芝居の小道具のほか、伝統行事・儀式・茶道などの道具として用いられることが一般的。なか

でも京和傘は、茶道家元のお膝元であり神社仏閣も多い土地柄ゆえに、需要も多い。シンプルで美しいその姿が、美意識を重んじる京都で好まれてきたことも大きいといえよう。

竹骨、木工、和紙、和傘…専門職人の技を結集

数ある工芸品の中でも、和傘ほど複雑に変化する構造を持つものは非常に珍しい。その構造を担っているのが、竹の傘骨である。洋傘ではスチールなどの骨が通常8本なのに対し、和傘の場合は竹骨が30～70本。竹骨職人が細く割り、割いた順番通りに組み立てることでぴったりと骨が揃い、閉じたときのシルエットは元の1本竹のように、しなやかなカーブを描く。この竹骨は、糸でロクロと呼ばれる木製部品に繋いでゆき、開閉できる骨組みが完成する。

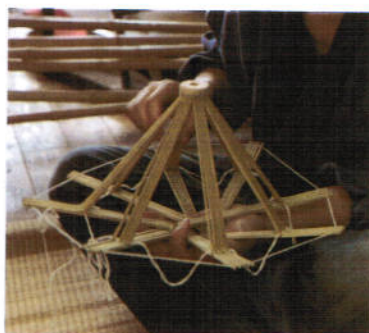
骨組みができると、次は紙を裁ち、張りこむ作業へ。洋傘は生地を骨の外側に巻きつけるように畳むのに対し、和傘は骨の内側に和紙がきれいに畳みこまれる。



修理や張り替えをすることで、長く愛用できるのが京和傘の魅力。



顔料を塗る作業。カシュー、漆など傘の種類によって使い分けられる。



ランプシェードの下から見える美しい竹骨も傘と同様の構造。

京和傘や蛇の目傘、番傘などが所狭しと並ぶ。日本らしい、やさしい色合いが目立つ。



下から覗くと和傘の技術が照明に組み込まれていることに気づく。

1本竹のように納めるため、中置、軒、胴、蓑、から巻き、頭包み、手元等と呼ばれる部位に適した厚さの和紙を糊で張り分けていく。和紙を張り終えた傘は、乾燥させ傘紙を折り畳む。この作業の良し悪しが傘の使い勝手や美しさを決めるため、竹へらを使いながら傘紙と骨をていねいに密着させていく。

傘骨の数ほど工程があるといわれる和傘づくりだが、ここからはいよいよ仕上げの段階。傘の種類やデザインにより顔料・漆・カシュー等を塗って乾かし、防水を施す和傘（番傘・蛇の目傘・野点傘等）には垂麻仁油も塗り数日～2週間ほど天日干しする。最後に飾り糸付け、かっぱ付けを施し、ようやく完成となる。

和傘業界を支えるために技術を応用

全国的に見て、和傘を生産しているのは10軒ほどしかない。京和傘に至っては、江戸後期に創業した日吉屋ただ1軒。店の立地上、茶道との関係が深く、本式野点傘を納め、世界の賓客を迎える茶会でも重宝さ

れている。「和傘は茶道具屋さん、呉服関係の間屋さんなどから御用命が多いです」と日吉屋の五代目、西堀耕太郎さん。とはいえ、伝統行事や日本文化と寄り添う道具であるため、連日売れるものではない。そんな折、天日干ししている白い傘紙から射しこむ、光の美しさに気づいたという。「照明なら普段使いの需要があるのではないか——」。基本的な構造、骨や和紙といった材料は和傘と同じなので、伝統の技を照明に活かせるのでは、と考えたのだ。

伝統や文化とゆっくり寄り添いながら歩んでいる京和傘。修理や張り替えを繰り返しながら、長く使えるよう、百二十余年受け継がれてきた技が今なお根づいている。この技を現代に活かし繁栄させること、これも伝統産業が担う大切な使命であろう。

「伝統とは革新の連続である」。五代目の和傘への愛情が、業界を支えていくに違いない。

（取材協力：「日吉屋」<http://www.wagasa.com/>）